

---

# Mixed juice ~カラフルな恋の物語~

三月 亜莉棲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Mixed juice ～カラフルな恋の物語～

### 【ΖΖコード】

N8344Y

### 【作者名】

三月 亞莉棲

### 【あらすじ】

俺は、彼女に初めてあつた。

いや——初めてじゃない。前に何度もあつている。

バカ騒ぎしてし�ょっちゅう笑われた、小学校の時と全然違う彼女の姿。

いろんな恋は不思議に絡み合つ。  
ミックスジュースの甘い香りに連れられて・・・。

更新が少し間が開きやすいかもしません。

それでも見てくださる方、最後までどうかお付き合い願います

## 登場人物

(登場人物)

渕上 佑大 フチガミ ユウタ (20歳)

紅岬大学経済学部の2年生。

スポーツ万能成績優秀顔もまあまあ。（篤郎とハウスシェアしている。）

万葉と5年ぶりに会う。

吉福 万葉 ヨシフク カズハ (19歳)

紅岬大学音楽学部の1年。

音楽が大好きで、ピアノを専攻。（友里恵と大河と香帆莉と都

竹とハウスシェアをしている）

祐大とは、5年ぶりに会う。

街矢 大河 マチヤ タイガ (19歳)

紅岬大学建築学部の1年。

万葉とは、高校が一緒で仲がいい。（上同）

ずっと万葉が好きな事を隠していた。

嶺崎 香帆莉 ミネサキ カホリ (20歳)

帆月女子大学法学部の2年。

佑大と同じ高校で高校に入ったときから佑大が好きだった。（

上同）

大河の従弟。<sup>いどご</sup>

鈴宮 拓磨 スズミヤ タクマ (20歳)

雪原短期大学音楽学部の2年。

万葉の幼馴染で、同じく音楽が得意。

バイオリンを専攻している、万葉の憧れの存在。

朽網 友里恵 クタミ ユリエ （19歳）  
紅岬大学音楽学部の1年。

万葉と仲良しの幼馴染。歌が得意で声楽を専攻している。（上同）

篤郎が好き。

有村 玲衣 アリムラ レイ（19歳）

帆月女子大学語学部の1年。ハーフで英語がしゃべれる。

万葉とは小学校が同じだった。

峰岬とはたまに廊下ですれ違うくらい。（爽太と家が隣）

都竹 爽太 ツヅキ ソウタ（20歳）

雪原短期大学建築学部の2年。

鈴宮とは、大親友で玲衣とは幼馴染。

（玲衣と家が隣）語学が得意で、多国語（米、仏、中、韓などなど）が話せる。

（上同）

松本 篤郎 マツモト アツロウ（20歳）

紅岬大学経済学部の2年。

祐大の親友。友里恵と仲がいい。

（祐大とハウスシェアしている）

梶原 聖 カジワラ ヒジリ（19歳）

雪原短期大学経済学部の1年。

美亜の双子の兄。

玲衣の彼氏で都竹とはとても仲がいい。（上同）

梶原 美亜 カジワラ ミア (19歳)

雪原短期大学インテリア学部の1年。

聖の双子の妹。

都竹とは結構仲がいい、玲衣とはよく廊下でおしゃべりすると  
こうを

生徒が目撃する。絶世の美女。

(上同)

## 登場人物（後書き）

少しずつ増えていくと思います（汗）  
読んでくれるとありがたいです  
感想＆コメントお願いします（笑）

## Mixed 1 ↪ 再開 ↪ (前書き)

お話スタートです  
第三者視点

## Mixed 1 ↗再開

4月。

爽やかな風とふんわりとした桜が皆を迎える。

今日は紅岬大学の入学式。

有名な音楽、学問、スポーツ、すべてをかねそろえた大学、『紅岬大学』は皆のあこがれである。

主人公、渕上佑大は学問の部門でこの大学に去年の4月、入学した。

「なあなあ、佑大。今年の入学生代表の挨拶は美人さんだつてさ！」

これは、佑大の親友。松本篤郎まつもと あつろうである。

「それがどうしたつてんだよ。どうせお前は自分の後輩が来るからうれしいだけだろーが。」

「あつバleted?」

「バレバレだよバーロ。」

楽しい会話を終え、佑大は生徒代表の言葉をするため、松本とともに

体育館に入つていった。

「おい！祐大、俺後輩見つけえ～～」

「あれつ？あいつ・・・。」

「そうだぜ、朽網友里恵。くたみ ゆりえ 可愛い小学校の時の後輩だよ～」

「つてことは、俺の知り合いの幼馴染だな。」

「へえ・・・？誰だよそれ、女？」

「だまれ、はじまるぜ。」

入学式の始まり、学長や教授紹介などが終り、祐大の生徒代表の言葉も終わった。

そして、

「入学生、代表の言葉。代表者は前へ。」

「コンツ・・コンツ

「万葉かずは・・・?」

桜が綺麗に道をほんのり桃色に染め、  
明るい太陽はふんわり、それを照らしている。

Mixed1 ↪ 再開 ↪ (後書き)

どうだったでしょうか?  
感想等よろしくおねがいします

## Mixed2 万葉と友里恵

「今日は、天候も快晴。すがすがしい入学式となりました。

私は、この大学で友人とともに学問に励みすばらしい大学生活になることと思います。

自分の良いところや悪いところ。良いところは伸ばし、悪いところは良いところになるよう

頑張って伸ばしてゆくつもりです。

それをこの学校でできることを感謝します。

平成 年4月12日。代表、吉福万葉。」

パチパチッ

拍手が万葉に舞い落ちる。

入学式終了後、帰宅途中。――

昔、万葉と仲がよいときは福岡の実家でよく遊んだりした。  
まあ、万葉とは同じマンション、号室は佑大の上が万葉だった。

まあ実際、朽網友里恵と万葉を『幼馴染』と呼ぶなら、  
佑大とその兄、リョウヤも万葉の『幼馴染』だ。

「それでさあ、玲衣もそういうてたんだよ～（笑）」

「うつそ～（笑）でもそれありえるわ～。」

「アハッだよねえ（笑）」

あれは、うわさをすればと言つ感じに、朽網と万葉だ。

その後ろには・・・

「よつ 友里恵ちゃん久し振りい 5年ぶりだねえ！」

「あつ 松本先輩！お久し振りです」

「あつ、松本篤郎先輩ですよね！友里恵から聞いてますよ～？」

「ちよつと万葉う～言わないでよ～はずいかり～！」

「アハハッキミたちほんつと仲いいねえ」

「～はいっ～！」

アハハッ

普通に笑えている。

篤郎はのんきでいいものだ。

俺には到底かなわない。

吉福万葉。小学生だった頃、初めて年下に恋をした、その相手。

結局、その恋はかなわなかつた。

俺が告白できないまま、大丈夫だろ?と甘い気持ちで中学に入学してしまつたからだ。

次の年、万葉は中学には入学してこなかつた。

後で後輩に聞いたところ、彼女は6年のとき、塾に入り成績が上がり他の有名な私立校に

入学したことだ。しかもそれを聞いた相手は、万葉の仲の良かつた友人。

『有村玲衣』だった。

それでも、俺は万葉のことが気になつて仕方がなかつた。  
だから、彼女のろくに作らず交際した女性は自然消滅で消えていつた。

「あつ!佑大。そこにいたか!」

間が悪いものだ。

こんなにあつさり、好きな女にばれてしまつなんて——。

## Mixed2 万葉と友里恵（後書き）

次回まで投稿しちゃいそつた勢いです・・・（笑）

最後まで、お付き合いしてくれたらありがとうございます

Mixed3

再開、そして知らない男（前書き）

大河登場です

## Mixed 3 再開、そして知らない男

「篠郎、やつ きか「ら」ひるせーんだよ。  
頭の中にガンガン響くわバーか。」

「ひでーな。いいじゃ ねーか、そういうや 万葉ちゃん。佑大の幼馴  
染なんだつて?」

『言われてしまつた。

一番言われたくなかった。

『いいえ? ただ単に家が回じマンションだつただけですか? 』

?』と  
いわれるのが怖いから。

万葉はなんとこつのだろ?』

『もちろんー昔は仲良かつたですよ』とでもこいつてくれるだ  
るつか。

『やつ ですよ よくマンションのトドマンションの他の部屋の子  
も交えて

遊びました(笑) まだ、小学生だつてですか? 幼かつたです  
よ(笑)』

まじか・・・。

泣けるぜ、万葉。

ありがと。願いを叶えてくれて。

「そつかー。友里恵ちゃんは一緒に遊ばなかつたの？」

「たまに遊びましたね（笑）ほとんど佑君が万葉に追いかかれましたけど・・・（笑）」

「へつ？佑君？」

朽網友里恵消えてなくなつてしまえ――――――！

なんでいうんだよ！万葉がこれから俺を苗字で呼ぶかもしれないのに・・・。

恐怖が余計深まるじゃねーか！

「ああー昔は母さんが俺の事を佑ちゃんって言つてたから、万葉に佑ちゃんって言えってなつて佑ちゃんって言い始めて、その後、佑君になり佑になつた。」

「『大』が全部ねーな。」

「まあな。」

ゆつてしまつた・・・。

篤郎に昔他のやつに『佑』といわれ母親には『ちゃん付け』で呼ばれていたことを（涙）

万葉が口を開いた。

「そうだったねえ そうだ！これから遊びに行かない？暇だし・・・

•  
○  
└

「いいね！万葉ナイス！」

俺も賛成！！

「わかったよー。これやー、こいんだり? これやー、こー。」

とまあこんな感じでこの後、いつぱい遊び俺たち男子は万葉と朽網を送る事になつた。

**M i x e d 4 僕の知らない男、彼女の親友（前書き）**

新キャラ作りました！

詳しくは登場人物を見てください！

## Mixed 4 僕の知らない男、彼女の親友

「じゃああたしたちの家」だから

そこは、とてももなくでかい洋館。

「お前にこんなところと住んでるの・・・？」

「そうだよ。祐君と篤郎先輩もあがつていきますか？」

「い・・いの？」

「はー」「

洋館の中――

「どうれ、少し散らかってますナビ・・・。」

「「「どうが散らかってるんだーっ」」

これまた、綺麗に整理されたリビング。

散りかってるといひなどひとつもない。

「そんなに驚いてびびったんですか？わたしたち、いつもこんな感じですよ？」

そんなとき、奥から誰かが歩いてきた。

「お帰り、『万葉』『友里恵』。結構遅かつたな。」

「誰だらう。知らない男だ。」

「ただいま、大河。香帆莉さんたちはもう寝ちゃったの？」

「いや、聖は起きてるけど・・・香帆莉姉はわかんねー。  
美里はおもいっきり寝てるぜ。」

「誰なんだ。こいつ。」

「そ、うなんだあ、まあいつか。あつやうだ、友里恵。『めんけど  
あたし今度のオーケストラ演奏会  
の練習があるから』めんけどあとよろしくね。」

「わかった。がんばってね？ 演出は？」

「シヨパンとデビュッサーの選曲集よ。」

「いいね ウウ頑張つて！」

「うん。」

そして万葉は部屋に入つていった。

そのあと、とうあえず大河に自己紹介をして、自宅に戻つた。



## Mixed 5 大学での災難（前編）

「であるかあらへーとなる。そしてこれは～～」

ああめんди。

とじとんめんди。

大体レポートを一日に2つも出すバカな教授いるか？

ほんつとめんди。

しかも、今日は午後まである。昨日みたいに簡単じゃない。

それに・・・

（どうしたんですか？渕上先輩。）

そう、街矢大河。

「いっは建築学部の癖に経済学までとつていやがる・・・。

「それでは解散！レポートは25日までに提出だ！」

うへえ・・・。

「25日までに絶対終わんねー。」

「とりあえず飯くつて落ち着いてしたほうがいいな。」

「とりあえずカフェテリアに・・・」

「先輩、カフェテリア行くんですか？」

「そうだけど?」

「じゃあ一緒に行きましょー!」

「いいよ レポートしないといけないし」

「そうですね!」

「おっ! 万葉、友里恵今から雇?」

「そうだよ。一緒に行く?」

「いいねえ 渕上先輩も一緒にいい?」

「「もつちろん!」「」

というわけで・・・。

俺はここに振り回され一緒に学食を食べるためカフェテリアに行く事になった。

## Mixed7 大学での災難（中編）

「え・・・。留学するのか？」

「そりや。大河、友里恵と一緒にいくの。」

俺は絶句した。

そう、万葉は俺が卒業する来年にフランスの音楽学校に留学する。

でも、なんでだろ？ わざわざどうして来年なんだ？

別に卒業してからでもいいのに・・・。

でも、少しうれしかった。

俺は、将来作家になる夢を持っている。

経済学に入ったのは知識を入れておくため。

そして俺も、来年フランスの専門学校に留学する予定だ。

「そりやんだ。じつは俺も来年フランスに留学するんだぜ。」

「ほんとー？」

嘘だ。

驚いた振りしても無駄だ。

俺は知ってる。嘘をつくとき万葉はいつも手をいじつている。

「ああ。何処の学校？」

「パリよ。佑は？」

「俺もパリだ。朽網も行くつて事はなんか目標があんのか？」

「ま・あ・ね・まあうまくいつたら教えてあげる（笑）」「

ああ。

なんていい事があつたんだ。

でも、そう長くは続かなかつた。

大河が俺たちの目の前で万葉に告白したからだ。

・・・

「俺さ、前から言おうと思つてたんだけど、お前が好きだ！」

万葉。」

万葉は固まってしまった。

「か、万葉？大丈夫か？」

万葉は口を開いた。

「何でこんなところでするの・・・。

大河、もう少し話がわかる人だと思ってたのに・・・（涙）」

ポロッ

万葉は涙を流しながら走つていった。

そしてたまたま俺と万葉が同じサークル『読書愛好会』の活動に  
もこなかつた。

++次の日++  
++

「佑、おはよ。昨日は、「めんね？」

大学に向かう途中万葉が後ろから歩いてきた。

朽網は一緒にやない、多分一人で行きたいと頼んだんだろう。

「ああ、もう大丈夫なのか？」

「うん。ありがとう、心配してくれて……。」

やつぱり、小学生の時はちがうな。  
静かになってる、でもそこが新しい万葉の特徴なんだろう。

「一緒に行くか？」

「うん…それと…」

「どうした？」

「あのね…これからは一緒に歩いて欲しいの。」

「い、いきなりどうした？」

「どうしたんだ。」

さすがに変わったとはいえ、おかしい。

「中学、じつはわざわざ違つて行ったの。それで…。」

「それで？」

「それで・・・。じつは、嫌われるんじゃないかと思つて。」

「なんで？俺がお前を嫌うんだ？」

俺が万葉を傷つけるようなことをしてはいないし、  
万葉にきもいとかそういうことは言つたことははない。

お互い仲が良かったから、『バカじゃないの』とか『アホ』とか  
お互いがいうことしか言わなかつた。

「え・・・？だつて手紙、佑からでしょ？」

「俺が手紙？」

「だつて佑が中学に入ったとき、手紙くれたじゃない。」

俺が手紙？

だつて、中学ではすでにお互い携帯を持つていてメルアド交換も  
していたから

手紙にするはずがない。

でも、俺じゃなかつたら？

大体検討はついた。

「それ、リョウヤかもしんねー。」

リョウヤの企み、そして思い

「え・・・。リョウヤ君？」

まだリョウヤの呼び方変わつてないんだ。

まあ俺もだけどな。

リョウヤは、俺の兄貴。

長身でそれこそモテる。（俺もモテるらしいが彼女をまともに作つたことがないからわからんねー）

まあ顔は俺とリョウヤ、二人とも親譲りだかんな。

周りの反応では母さんはそこそこの美人。  
そして父さんもそこそこの美男。

まあいってみれば美面ぞろいの家族ってことか。

「そうだ。だって俺は中一の時すでに携帯持つてだからお互いメールじやん？」

「そうね～？」

「だけど、そんときリョウヤは何にも理由がなかつたから持つてなかつた。」

「えつ？」

「俺は塾とサッカーで忙しかったけど、リョウヤは塾だけだったから。」

「そういうこと……じゃあ。」

「信用していいの？」

「あつたりめーだろ。バーカ。」



## リョウヤがいる

私は普通に佑たちと4人一緒に授業が終わつてお昼を食べるためにカフェテリアに向かう途中、見つけてしまった。

「リョウ、ヤ、くん、？」

「あつ！万葉じやん。」

「リョウヤ？なんでここにいんだよ。」

「母校だからな。べつ自由だろ、それは。」

「そりだけどよ。」

なんでコロコレいるの？

だつていま、就職したんなら会社かどこかにいるでしょ？

お昼休みでも、とすがにスーツだつてしまふ。なんで私服なんだ

リョウヤサイド + + + +

「リョウ、ヤ、くん、？」

「おっ！万葉じゃん。」

「リョウヤ？なんでここにいるんだよ。」

「母校だからな。べつ自由だろ、それは。」

「そうだけじょ。」

おつかしーな。

なんで佑大と万葉が一緒にいんだ？

朽網が兄貴のアキラから万葉と一緒にたって聞いたけどよ？

元に戻つて万葉サイド・・・

（佑、なんでリョウヤ君がいるの？）

（わからんねーよ、俺も知らなかつたし俺事態が篤郎ヒルームシエアだから。）

（そつか・・・でもなんで？）

（お前に会いに来たんじゃねーか？手紙の事もあるし・・・そろそろ告るとか？）

（ちよつとー！でも、やつじやないと来ない、よね？）

「なにこり話をしてんだ？」

「「な、なんでもない（よ）？」

危なかつた。

でも、佑の言ひ事が本当だとしたら……

佑、危ないんじゃないかな？

佑の予言は大当たり、リョウヤの告白

「ねえ、佑大。ちょっと万葉借りてくれ」

「うちはねー」

「ツヨウヤ君ちよつ・・・」

さらわれてしまった。

「俺、予言者として食つてけるかも・・・」

「なにいつてんの！さつさと万葉たち追いなさいよ！」

「でも……」「で、でも……」

ガシツ

俺は朽網に腕をつかまれ少し遠くに連れてこられた。

(あんた、万葉のこと好きなんですよ？)

(なつ！／＼＼＼)

(バレバレだよ。あたしと万葉、それに佑君。いつから一緒にだと  
思つてんのー? )

( そ う だ な ． ． ． こ つ て み る ． ． )

ダッ

俺は走つていつた。

屋上

「 む じ つ つ り て き て い あ ん 。

「 う 、 う う さ 。

「 あ の せ 、 俺 お 前 が す き な ん だ よ 。

「 ． ． ．

「 そ れ で さ 、 お 遣 み せ う

バンシ 「 コ ユ ハ ヤ ー フ ザ ハ ク ハ ジ ハ ー ハ ヴ ハ ー 」

「 な ん で 来 る ん だ よ 。 お 前 に は か ん け ー ね ー だ ろ 。

「 あ る ん だ よ ． ． ．

「 な ん で 来 る ん だ よ 。 お 前 に は か ん け ー ね ー だ ろ 。

「ほ？」それで何が関係あるんだ？」

「とりあえず、お前の企みはお前をこの大学で見たとき  
二人ともわかつてたんだよ！」

「なーんだ。あつそ、なら強行突破だな。」

ガシツ

うそだろ！？

リョウヤは万葉を抱き寄せ屋上から飛んだ。

バラバラバラッ

へつへりがなんで！？

「じゃあな。あと、これからほかの女と結婚するなら、  
Global consultant HUCHIGAMI  
グローバル コンサルタント フチガミ  
をどうぞ～」

万葉が連れ去られてしまった。

そのあと、友里恵が調べてみたところ、

グローバルコンサルタント HUCHIGAMIは  
Global Consultant HUCHIGAMIは  
リョウヤが社長を務めるホテルや、病院などを経営する大手企業  
だった。

## 連れ去られた万葉（かのじょ）

「じゃあ強行突破だな。」

「キャッ！」

う・・・そ・・・。

私は寝てしまった。というより、眠らされてしまったといったほうが妥当かもしない。

しばりへじへ・・・

「ん・・・」、「じびじび」

静かだけど、ものすくべ大きい。

ホテルのスイートルームか、どこか大きい家の一室だろう。

「あ、起きた？」

「リヨ、リヨウヤ君。」

「うー、俺ん家のゲストルームなんだ。」

「リョウヤ君、なんでこんな大きい家に？」

「俺が会社経営してるかんな。」

「や、やつなん、だ。」

会社経営、か。

す、いな。

「それでさ、さっきの返事くれない？」

「や、そんな・・・急には無理よ・・・。」

「そつか。じゃあしうがねーな。しばらへ待つよ。答へが出るまで。」

私はこのとき、リョウヤ君ひどく迷惑をかけていて情けない気がしてならなかつた。

友里恵の考え方そして、万葉の居場所

「どうしよ・・・万葉。」

「探すしかねーけど、それでも手がかりが…」

「会社も駄目だしな……とにかく、何でもやせ？」

連れ去られてしまつた万葉

後は残されたのは、依方里思、篤良が二十九

「私的には、リミちゃんの家に行つたと想うんだけど……あれつ？ ちょっとまって」

友里恵が考え始めた。

しばらく沈黙が時間を支配する。

すると突然、

一  
なんたよ

「さつき、ヘリが来てたでしょ？しかも、それで会社に行つてな

いとしたら

私、何処かわかるわー！

「じゃあ行こうぜー！」

この意見を飲み、皆は万葉を探しに走つていった。

ココだった。

「ミミツル」

一、大学の裏にある豪邸

前々から謙が住んでるのが気になつてたの

ピンポン

鳴らしてみた。

「あの、友達がそちらに伺つてないかと」

『ご友人のお名前は?』

「吉福万葉です。」

『そりでしたかあ。ビーハー。』

なんと玄関が開いた。

「朽網、  
すげー。」

「ナニヤアサヒ」

「すつげー」

家の中に入つていつた。

「万葉さま、お客様がいらっしゃつてますが・・・」

『お客? わかりました。通して大丈夫です。』

ガチャッ

ドアを開けて入つたその先には、

「万葉!」

「万葉! なんでまたピアノなんか・・・」

「そうだぜ? 万葉ちゃん。」

万葉がピアノを弾きながらのんびりしていたところだつた。

助けていただきました

「万葉あ～。これってさ～ってオメーラなんでいるんだよーー？」

「リョウヤ。もう、お前の好きにはさせねーぞ。万葉は俺らに返してもらうかんな！」

そのとたん、友里恵がリョウヤのお腹に蹴りをいれ（友里恵は意外と合気道の県大会チャンピオンだつたりする）

その瞬間、佑大が万葉を抱きかかえ篤郎は佑大を抑えよつとしている男を蹴りでなぎ倒し、

友里恵、篤郎、佑大、万葉は無事、リョウヤの家を脱出した。

「ゆ、佑。」

「なんだよ」

「そ、そろそろ下ろして？」

「わかつたけどよー、走れよ?」

「う、うん」

万葉は一緒に走った。

しかし、なぜか友里恵と万葉は少なからず白樺できるほどに足が

速い。

友里恵は昔、陸上系クラブに入っていた。しかし、万葉は昔から運動が苦手だ。

ただし、水泳は出来るのだが・・・

「万葉なんでそんなにはえーんだ?」

「知らないわよー」れでも、必死に走ってんだからねー。」

「コーヒー。」

まあ、そのまま友里恵と万葉の家に4人でむかっていった。

「おかえり あいらつたの?えらべゼーゼーいつるじやない。」

「

「それはどうでもいいでしょー。」

「はいはい・・・。あいら、渕上君・・・。」

「み、嶺崎?」

「」のとおり、友里恵と篤郎は嵐が来そうな予感がした。



## 久し振りの再開？

「ひ、久し振り。渕上君」

「おひ」

そのとき・・・

「あ、友里恵、万葉。お帰り」

「た、ただいま。大河。」

助かったといわんばかりに友里恵は話に答えた。

「ゆ、佑。ハーハー、これから、どうするの？」

まだ万葉は息が切れている。

「そうだな・・・帰る途中に、とかねーといいんだけど・・・

「じゃあ「」にいれば、泊まつてきなよ。」

「あー、で「やつたね！俺泊まつてく！」

佑は、篤郎に少しばかり睨みつけた。

そのとき・・・

ピラリーン ピラピラ ピーラー（着メロ）

「あつ・・・万葉、あたし今日は友達の家にいくわね」

「は、はい・・?」

ガチヤン

香帆莉はいつてしまつた。

「佑、もしかして知り合いなの？」

「高校が一緒だつた。」

「万葉ちゃん、佑大は嶺崎に告られたことがあるんだよ。。。

」

「あのね・・・。渕上君、その・・・、付き合つてくれない？」

一瞬の沈黙があたりを支配する。

「『』めん。俺、好きなやついるんだ。」

学校の放課後。雑木林のある校舎の裏。

「そつか・・・」めんねつ

タタタタタタタタタッ

彼女は走つていった。

嶺崎 香帆莉。

そこそこの美人。

自由端麗。いわゆる、『大和撫子』

「私は、あなたのどこを好きになつたんだろうね・・・。」

香帆莉は、家の自分の部屋で泣き崩れていた。

香帆莉が彼を好きになつたのは・・・

『彼』と『キリ』を重ねていたからかもしれない。

## 嶺崎の過去　？

彼、鈴宮拓磨は私の初恋であり、初失恋の相手。

中学の入学式、私は一瞬にして田を奪われた。長身のとつても気さくそうな彼。

一田で恋に落ちた。

でも、壁があった。

「鈴宮へ」「拓磨あー。」

「なんだよ。大声出すんじゃないぞ。」

「めんめん（汗）やうこえは佑は～？」

「知るか、んなもん！」

「ええ～！教えてよう～。」

「やーだ！」「教えてー。」

吉福万葉。

彼同様、気さくで明るく皆にすぐ溶け込んでいた1つ年下の彼女。私は勝てなかつた。

小学生の時から物静かで友達を作るのが苦手な私は中々彼に話しかけられなかつた。

だから、明るくて気さくな彼と彼女がつりやましかつたのかもしない。

二人は幼馴染だ。それにその頃『両思い』という噂もあつた。

そして私は自分で勝手に失恋した。

いまだかつて一度もなかつた初恋と初失恋を、私は悲しい思いにとらわれながら

その物語<sup>おもひ</sup>に終止符を打つたのだ。

## 嶺崎の過去 ? (後書き)

過去編パート?ですね

あとひとつぐらいで過去編は終りかな? (きこしてどうすんじやい!)

感想等お待ちしております

嶺崎の過去　？

「今日は桜が綺麗・・・。」

今日は高校の入学式。

そしてまた私は恋をした。

渕上佑大に・・・。

彼はどうとかといつと身長は普通くらい。

お兄さんがいてとっても似てる。かつてない。

席が田の前にある。

でも、いけない。

でも、これは駄目。言わなければ。

「あの・・・。通してもういいですか？」

「あつ？ああおづー！」

「ありがとうございます。」

彼と私の出会い。

私と彼は席が隣だったに過ぎない。

でも、いつから好きになつたのかな？

ひょっとしたらもつと前かも知れない。

学校に行く途中？校舎に入つて？

わからない。でも、

『運命の赤い糸』で結ばれているのかなって考えてしまった。

## 大学のレポート

「それはこいつでしょ。」

「もーわかんねー。」

「」はお皿のカフェテリア。

なのにしている。まあ今日は皆中で食べてるからね。

多分、教授たちに居残りを頼んで欲しくて（そもそも歸し始める頃なんだと思う。）

中で食べてるんだろうけど。

しかも、私たちがするのは各授業のレポート。

私は好きな科目だからすぐに終わりそうなんだけど・・・

大河と佑はもう、やばい・・・

文系で文章を書くのを得意としている私はずっと付き切りで教えなきやいけない。

「おわったあ～～～！」

「遅いんだけど？佑。」

「いいじゃん。これで遊べる。」

「俺あと少しなんだけどここが・・・」

「はいはい・・・何処ですか?」

もう、疲れた。

助けてよー!友里恵。

でも、友里恵は数学関係の勉強で精一杯みたい。

わたしつてなんでこんなこと引き受けちゃつわけ?

## 帆月女子大学（前書き）

香帆莉が友達の家に泊まった次の日です。

「ふあ～～～ん。眠いなあ・・・。」

私は有村玲衣！

前話までに登場した万葉の友達だよ！

スツ―――。

私の横を誰かが通つていった。

ここは、1年生フロアだから年上がいるわけがないのに、  
顔が広い私でも・・・あの子誰だろう？

お昼、カフェテリア。

「ねえねえ、清乃。今日―――」

そのとき、見ちゃつた。

「ね、ねえ！清乃。の人誰だかわかる？」

「ああ、あの人人は2年の嶺崎香帆莉先輩だよ。」

「へえ・・・。」

なんだか、いつも悲しそうな顔をしてる。

どうかしたのかな？

このとせ、この先何が起るかなんて誰もわからなかつたし、予

測も

出来なかつたと思つた。

ありえない

「そりそり、だからこれはこうで、これはこうーよしつーできた。

」

「ほえー。ありがとう佑。」

「いえいえ（笑）」

ここは、帆月女大と紅岬大の中間地点にある、カフェ。  
結構人気だから帆月の生徒も紅岬の生徒もよく来ているなじみの  
カフェだ。

「かつ万葉ちゃん・・・それに渕上君も・・・。」

「香帆莉さん。こんにちわ」

今日は大学が休みの日。

えらい人はこういう日でも大学に行くの。私はいつもなら友里恵  
と宿題済ませてるところなんだけど、今日は佑に誘われて初めて二  
人でカフェにお出かけしたんだ。

ターンターン タンタンティティタテイ タタタターンティタタ  
ターン

「うめんなさい。もしもししつ？」

「あつ 香帆莉！？あんたのお母さんが！」

「えつ！？今すぐ帰るわ。うふ。じゃあ。」

「ピッ

ガシツ

香帆莉が電話をきつたとたん。

香帆莉は佑の手をつかんで走つていった。

「ふえつ！？ちよつ嶺崎！？」

「あつ 佑！」

佑が連れ去られた。

私の中には絶望が心をみたし、  
気が付いたときには涙が出ていた。

## ありえない（後書き）

次で、香帆莉が佑を連れて行つた理由がわかるかな？  
その次かも・・・わかりませんが見てつてやってください（汗）

## お母さんのため

タタタタツ カサツ

「おーーー嶺崎つてばーーー」

タタタツタ・・・ カサツ

「どうしたんだよ。こきなり連れ出して・・・」

「お願い、いまだけ。話をあわせて・・・。」

俺はさつき、万葉と勉強を<sup>データーントといいたい</sup>していったとき、  
嶺崎が携帯で何かあつたらしいことを聞いて俺だけ引っ張られて  
『』にいたる。

『 205、『ウシシ 』 嶺崎 <sup>ミネサキ</sup> 美苗 <sup>ミナエ</sup> 様』

ガラッ

嶺崎が病室のドアを開けた。

「お母さん……。」

そこには嶺崎が少し老いたような風に見える女性。  
そして嶺崎の『母親』だ。

「香帆莉……。」めんね……？最近真面目くて。」

「ううん。そうだーお母さん。この人が私の婚約者だよ。」

「あ、う……。」

婚約者……。

妃アンセ

まさか・・・、嶺崎の両親はあと少し・・・。

「娘を、お願いしますね・・・。」

カサツ

ピーツ ピーツ ピーツ

「お母さん・・・お母さん・・・。」

嶺崎は何度も『母親』の名前を呼んだ。  
だけど、もう『嶺崎 美苗』は帰つてこなかつた。

「ああああああーーーおかあさんーーーいやあああーーー」

嶺崎の頬には、『雨(涙の霊)』がつたつていた・・・。

## お申らせのためて（後書き）

これでわかつていただけたのかしら・・・

自信がありません（汗）

わかつた方は感想お願いします。

リクエストもお待ちしております

## 万葉が思ったこと

「はあ～・・・」

私はいま、一人でさびしくレモンティーを飲んでいる。  
なぜかつて？

佑が香帆莉さんに連れて行かれたから、ビリする事も出来ずそのまま  
カフェに残っているの。

「万葉？」

「爽ちゃん。」

この人は私の憧れの存在であり、友達の玲衣の幼馴染。  
玲衣ちゃんと遊んでいる時はいつも一緒にいた。

「どうしたの？ってかそれ、渕上のじやん。」

「そうなの。佑・・・。」

「渕上、なんかあったのか？」

問われたおかげで爽ちゃんにすべてを打ち明けてしまった。

でも、そのまゝがいいと思つた。

だつてそのほうが何か佑に戻つてきてもうつ方法が見つかるかもしれないじゃない。

「そつか・・・渕上、どうしたんかな」

「わからぬ」・・・・・。

「じゃあ・・・・・って・・・・・。」

そのとき来たのは

「爽太、ここで何してんの?」

「も、もしかして玲衣?」

「そうだけど・・・あんた誰?」

「万葉だよー!吉・福・万・葉・ー。」

「ああ!久し振りだね でもなんで一人が?」

「たまたまだよ。渕上がああ・・・・・。」

「渕上先輩どうかしたの?」

「香帆莉さんにつれてかれちやつたの・・・」

「か、香帆莉さんが！？」

「そり・・・。」

しばらくの沈黙が続いた。

しかし、それは彼女のおかげで破られた。

「私、いい考えがあるよ。」

## 作戦1！

「ふふふふふ」

「ねつ？ いい考え方でしょ？」

「いいと懸つ。でも、万葉は」

「わかつてゐて、そう思つたからあなたにしか言わないんじゃない！バカ。」

「うつせーー！」

ただいま、私は考え方を聞かせてもらつてしまふん……。

なんか私が聞いてたら絶対失敗するんだつてさ……。

なんかひどい……。（怒）

「うう」と万葉。いまからうちらが頼むことをしてね？」

「よしつ。じゃあとりあえず万葉、渕上先輩のバッくもつていったん帰んな。」

「くつ？ ……わ、わかつた。」

結局、私は考えを聞かずじまい・・・。

作戦は実行に勝手に移されてしまったの。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8344y/>

Mixed juice ~カラフルな恋の物語~

2011年12月25日19時49分発行